

牧草と園藝

雪印のたね

通販開始十周年記念特売



雪印種苗株式會社



飼料緑肥種子編
秋季目録

昭和三十年

酪農ブームから酪農危機への反省

飼料生産の増大で経営の安定へ

五十一嵐 清

◎ 酪農の進展は当事者の脱皮が先決

酪農界における茲一二年の動きは、正に敗戦国としての日本の農業経済の縮図とも称すべきものと言えましょう。酪農ブームを醸し出した當時一部乳製品メーカーは、言を大にして乳価の吊上げこそ酪農振興の最大唯一の解決策であると叫び、まことしやかに集乳合戦に突入したものだ。そして一部酪農民とその指導者は、この無差別爆撃の渦中に巻き込まれ、全酪農民を動搖せしめる一連の動きとしようと試みたものである。しかるにこの酪農ブームなるものは酪農を憂うる幾多識者の予言にたがわず、曰く酪農恐慌となり、曰く酪農危機となつて、われわれの前に現われて来たのである。この冷厳な事実は全酪農家に対する一大警鐘であり、重大な教訓となつたことは事実で、この意味ではむしろ日本の酪農進展のためには、一つの収穫であったとも言えましょう。この問題が起つてから酪農民一般の声を要約すれば、その原因について次のような事を強く表明している。すなわち、農業政策の貧困、二、M.S.A.を初めとする乳製品の輸入が悪い。

三、生産と消費のバランスがとれてない。四、飼糧が高い。五、生産者が牛乳生産のコスト引下げの努力が足りない。六、中間のマージンが高すぎる。七、酪農民の組織が結集されていなかつた。等である。しかしこれらは一々もともな意見であり、結論であつたでありましよう。しかしそのもつともなことが果してこのまま鶴呑みにしてよいかどうかに問題があると思う。凡そ日本の産業経済は世界経済の一環である自覚を離れて今後共成り立つものであるかどうか、深い反

省が必要である。更にまた酪農業のみが国民経済から遊離した姿で伸展できるものであるかどうかに思いを致すことが肝要である。どの面から見ても、牛乳及びその製品は増産されても国民の消費を平衡的に増進させて、生産消費のバランスを保てるよう 당事者が不斷の努力をしなければなりませんし、一面今日のよう常に外國製品の圧迫を感じつつ悩々としているようでは全く問題にならないと思う。今日日本の經濟的独立と發展は、凡ゆる産業の部面において、輸出貿易の伸暢を期さねばならないのに、国内で製品や牛乳がダブついでいても、進んで輸出をしようという気持にならないのは全く不甲斐ないことと断ぜざるを得ない。口を開けば安い外国品と立ち打ちができるないという泣き言だけである。とは言えにわかに輸出もできないことは判りきっているが、今こそ酪農界は、業者も生産者も、速やかに脱皮して将来の發展のために勇敢に方向転換を画すべきときである。

◎ 酪農經營の基盤確立は飼料問題の解決にある

酪農ばかりでなく経済はすべて景気に左右され、物は高い方に流れ、高いものは採算があつて増産されることは一般の流れであるが、特に基礎工事が絶対に必要な酪農經營においては、この波に乗つて先走ることは余りにも危険である。

市乳目当の搾乳業者が飼料畠も少ないので牛をふやし、青刈のデントコーンや青刈牧草までも買ひ漁つて牛に与え、過二〇石にと駄くとも現在の二倍に増加することができれば、今までの酪農恐慌を乗り越え、明日の酪農危機を突破して、最も明るい、安定した酪農經營の将来が約束づけられるものと堅く信じて疑わないところである。

◎ 酪農經營を早くしつかりした土臺に上げよう

元来乳牛の導入は、優良草地や飼料源を先行せしめ、そのかつて酪農ブーム絶頂の頃、札幌近郊の市乳地帶において、市乳目当の搾乳業者が飼料畠も少ないので牛をふやし、青刈のデントコーンや青刈牧草までも買ひ漁つて牛に与え、過二〇石にと駄くとも現在の二倍に増加することができれば、今までの酪農恐慌を乗り越え、明日の酪農危機を突破して、最も明るい、安定した酪農經營の将来が約束づけられるものと堅く信じて疑わないところである。

トコーンを作つて搾乳業者に売込んだという例もあつたが、一口話としては済まされない要素を多分に含んでゐると思う。酪農經營はもちろん乳価と関連なしには成り立たないことは明らかだが現状は余りにも乳価に幻惑され過ぎてはいいだらうか、もつと經營の根底となる基礎工事の重要性に着目してその完成を図らなければならないと思う。

さて酪農經營の基礎工事として取り上げる要素はいろいろあるが最も重要な早期に解決を図らなければ、酪農が破滅の運命に追い込まれると考えられることは飼料問題であると思う。多くの人はこの牛は何十石生産した、あの牛は今年は三〇石搾つたという。なるほど搾つたがそれは酪農經營として一家の経済分析をして見てどうであつたかの結論は常に忘却されではないかということである。われわれが過去においてしばしば論じて来たように、酪農經營經濟という觀点に立つて考えた場合には、一頭の牛から幾ら搾るかという問題は、単に牛の能力の評価にすぎず、またその能力を十分出していけるかどうかという評定にすぎないのである。私共は常に一反歩の霜から何石の乳を搾り得たか、飼育管理者一人当たり何石生産したか、この二つの検討こそ、酪農經營における飼料經濟と労力経済の問題を一举に解決する根本課題であろうと信ずる。しかも飼料生産の問題が合理的に解決されるならば、これに追随して労力問題も部分的にはあるが大きく解決できるのである。この両面の解決ができる、いわゆる反当り牛乳生産量を現在二、三石のものを五、六石に、五石のものを一〇石にと駄くとも現在の二倍に増加することができれば、今までの酪農恐慌を乗り越え、明日の酪農危機を突破して、最も明るい、安定した酪農經營の将来が約束づけられるものと堅く信じて疑わないところである。

経済が発展しないし、また成り立たないのである。かく見てると日本の酪農も初めから出直さなければならないが、ここまで来たのは致し方ないことだから速やかに、酪農経営を本来の姿にするために早くしつかりした土台を築くことに努め、その土台にのせることが肝要である。

◎ 良質飼料増産の要綱

ところが、この重要な飼料に対する一般的の認識も極めて浅く、導入すべき草種の選択、土地の選定、その他施肥管理や放牧地と採草地の合理的配分利用等の面を見ても幼稚である。今後は良質飼料の増産が即座乳経済の向上になるということを深く認識して、たゞまつしぐらに良質飼料の増産確保に当たりたいものである。しかして飼料の増産確保の要諦として次のことを提唱したい。

第一には飼料作物は一番土地の良いところに播き、思い切り多肥栽培で増産すること。

このことは飼料作物ほど反当りの生産価値の高いものは無いと言つても過言ではないが（本誌一月号に反当りの生産価値を穀等に比較した金額で表示した記事をのせたのがある）。今までには一番良くない畑に、ろくに肥料も施さないで全くの撒き放しの事が多く、そのため維持飼料にも事欠くというみじめな状態であるが、これを是非とも徹底的に改めてゆきたい。反収が二倍になれば飼料畑は半分ですむ。刈取能率は倍になつて労力の節約になるなど、どの面から見ても経済価値が向上するのだから大いに注目すべき事柄であると思う。

第二には飼料作物は成る可く栄養価値の高い種類（改良のすすんだもの）のものをより多く作付すること。

このことは年間緑飼を連續給与できることになるのみならず、各作物の長所、短所を相互に補つて、総合的に欠陥のない飼料生産ができることになる。また栄養価値の高いもの、特に蛋白質に富むもの、家畜の嗜好に適し、消化率のよいものを選ぶことは、直ちに濃厚飼料の節約をもたらし、著しく経済価値の増大に役立つものである。

第三には良質な多汁飼料源の確保を図ること。

牧草その他飼料作物の増産と併行して泌乳量の増大に役立

つものは何と言つても家畜根菜類を中心とした多汁飼料の大増産である。この問題は冬期間緑飼の給与ができない地帯においては特に必要である。

第四には優良な放牧地をもつこと。

ラデノクロバーベ等を中心とした優良な放牧地の造成を図つて、労力経済の一助とするのみならず、飼料を潤滑に与えることのできる経営形態の要素を作つて置くべきである。

以上は概略的に当面せる酪農再建のキーポイントとして、最も手近かで、しかも実行の可能性の極めて多い、しかもその効果が急速に現われる自給飼料問題を主として取り上げたものであるが、この事が速やかに酪農家の各位の経営改善の一端として取入れられ実行されるならば、直ちに産乳経済が確立され、コストの引下げによって牛乳とその製品価は国民経済とマッチして、いやが上にも消費が増大して、日本の酪農は大いに進展するであろう事を確信してやみません。

芳香に満ちたオーチャードグラス乾草の収納作業状況

